竹林の家

エリー

兄弟神

　世界は、闇から始まった。
　原初の闇は、果ても終わりもなかった。過去も、今も、未来も、重なり合い、すべてに通じていた。
　闇の中で、無数の塊が集まり、散らばり、不規則にうごめいた。ぶつかるたび、熱を生んだ。熱は、塊を招いた。すると方位とともに、対流が生まれた。
　闇は脈打ち始めた。すると音とともに、時間が流れ出した。
　時間は、闇を切り分け、兄神を生んだ。
　兄神は、闇の中、独り生きた。形のない彼は、闇と溶け合い、闇をさまよった。
　彼は叫んだ。叫び声は、闇に広がった。けれど、彼の声を聞くものはいない。彼に気づくものもいない。声は、彼自身に返った。
　兄神は、独りを嘆いた。彼を生んだ闇は、彼の嘆きに共鳴し、震えた。すると光とともに、空間が広がった。
　空間は、光を切り分け、弟神を生んだ。
　兄神は、弟神に呼びかけた。すると音と光が響き合い、地上が姿を現した。
　地上は、柔らかく、泡立っていた。
　弟神は、地上を歩きだした。兄神は、弟神の後を追った。すると昼と夜が生まれた。
　時間が姿を現し、激しく流れだした。昼と夜が、死を持つ生きものを照らした。
　兄神は、闇の中から、生きものたちに語りかけた。しかし、誰も、神の名を呼ばなかった。誰も、祈りの声を上げなかった。
　弟神は、光の中から、生きものたちを見守った。すると生きものたちは、弟神の歩みに合わせて暮らし始めた。日々は、神の存在を暗示した。人は、自然の中に神を感じた。
　兄神は、悲しんだ。彼は、生きものたちと交わりたかった。しかし、小さな命に、大きな命は見えない。彼の願いは叶わなかった。
　弟神は、兄のため、自らの体を切り分け、人に与えた。すると人は、神に語り始めた。
　兄神は、人びとの声を聞いた。人は正しきことを求め、勝利を願った。
　神は、人を愛した。しかし人は、次第に神を忘れ、勝つことに夢中になった。
　地上は、敗者と死者であふれた。
　兄神は、争いを憎み、嵐となり阻んだ。風と雷が人を襲った。人びとは恐怖に震えた。
　弟神は、死者の魂を受け入れ、清めた。人びとは、神を思い出し、許しを求めた。神の家を建て、美しい女を嫁として住まわせた。
　神は、女を愛し、大切にした。
　女は、神を信じ、健やかに生き、死んだ。
　神は、死の悲しみを知った。慟哭は地を震わせ、人びとを困惑させた。
　人びとは神殿に通い、神を慰めた。すると地鳴りが静まった。それから、神詣では、神を鎮める儀式となった。
　時が流れ、人びとは再び神を忘れた。後には、由来の分からぬ習慣だけが残された。

密室

　夜明け前、神殿が鳴いた。
　鳴き声は、内部で増幅し、低いうなりに変わった。うなりは、波となり、空気を動かした。闇に、女の寝姿が現れた。
　女は寝返りを打った。緋色の肌襦袢から、女の匂いが広がった。
　湿り気を帯びた空気は、匂いを吸い込み、密度を増し、入口を求め渦巻いた。渦は広がり、女のつま先を舐めた。
　かかとを持ちあげ、女が渦を蹴った。衣が開き、端から内股が現れた。
　風は産毛を揺らし、内股を這い上がった。衣に滑り込み、下腹からみぞおち、乳房をかすめて、首筋から耳に抜けた。うなりが耳を塞いだ。
　女が目を開け、闇を見た。
　風は影となり、女の顔に触れた。影は緩んだ唇を押し広げ、女の胸に入り込んだ。
　闇の中で、影と息は一つに重なり、音に姿を変えた。音は、高鳴り、速度を上げた。
　影を吸い込み、膨らみ過ぎた女の胸は、波打った。指先が震え、呼吸が熱を帯びた。女の唇から、苦しげな声がもれた。
　影は声を飲みこみ、ますます膨らんだ。床に、女の身体を押し付けた。
　女は、膝を立て、もがいた。無数の汗が流れ落ち、体中を引っ掻いた。かゆみが肌を這った。女は腰を上げ、身体を反らせた。汗が噴き出し、絶えまなく肌を舐めた。痙攣が女を襲った。
　肺にたまった影が、女の胸を突き上げた。
　女は、歓声とともに息を放った。影が、女の唇から飛び出した。
　天井に舞い上がった影は、とぐろを巻き、漂った。
　息と影を吐き切ると、女は、床に崩れ落ちた。
　影は、天井から垂れさがり、女の身体に巻き付いた。
　女は目を閉じ、浅い眠りに落ちた。
　闇に、静けさが戻った。

籠の鳥

竹は、地面からまっすぐ伸びあがり、物静かに佇んでいる。意外なほど匂わない。目の前にあっても、どこか遠く、閉ざされた彼らだけの世界を秘めている。ガラス瓶に詰められた香水のように、青く甘い芳香を隠し持っている。

竹は香りを隠し、竹林は神殿を隠し、神殿は女を隠している。奥に潜むのは、神殿に籠り続けるお籠りさん。名を音川聖美（おとかわさとみ）という。

聖美は、日の出とともに雨戸を開き、日暮れとともに闇に籠る。緋色の衣をまとい、神のお下がりをいただく。仕事を捨て、家族を捨て、神を選んだ女。人と交わらず、棚に飾られた人形のように、異なる流れに身を置く。

かつて神殿は、頼るもののない人びとの住処だった。子どもは大人になるまで、女は嫁入り先が見つかるまで、神に頼った。

強く、美しいものから、去って行った。

病人や老人も、死に触れて神が嘆かぬように、自ら姿を隠した。彼らがどこへ消えたのか、誰も知らない。けれど人びとは、竹になったと信じた。

竹林は、不遇な人びとの墓標であり、村の大切な財産だった。家も、道具も、竹から作られた。

神と人と竹が作り上げた均衡は、大戦とともに崩れた。国は、弱い人びとの保護を始めた。神殿は無人となり、聖域が拓かれた。キャンプ場が作られ、毎年、多くの中学生が訪れた。聖美も、その一人だった。

食事も、睡眠も、休息さえも一斉に始め、一斉に終わる。身体の声を聞かず、条件反射で動く日々。号令が聖美を苦しめた。眠っている時でさえ、巡回の足音が耳に響いた。

闇の中で、人に囲まれ、動くことも許されず、時が過ぎるのを待った。一秒ごとに堅くなる身体に、死の感覚が広がった。

聖美は怯え、声にならない声をあげた。窓ガラスが震え、うなりが耳に返った。すると身体から力が抜け、金縛りが解けた。

布団に起きあがった聖美は、窓の外に影を見た。影は、竹林に消えた。

聖美は、影を追い、竹林に踏み込んだ。

竹は、太く黒い線となり、白み始めた空に格子模様を描いた。

竹林は鳥籠に姿を変え、聖美を包んだ。外へ出ることを拒み、外から入ることを拒んだ。静止した世界に、影の姿はなかった。

聖美は、大きく息を吐いた。すると影が現れ、呼吸とともに聖美の胸に入り込んだ。聖美は激しく咳き込んだ。影は吐きだされ、朝日を浴びて姿を消した。竹林には、聖美の身体だけが残された。

聖美は竹林から逃げ出し、布団に戻った。昨日と変わらぬ朝を迎え、昼過ぎにキャンプ場を去った。

けれど、籠から飛び出した小鳥は、空を舞い、やがてもとの籠に収まった。

竹林の家

　白米は、水を吸い上げ膨らんでいた。
　山根善吉（やまねぜんきち）は、土鍋の蓋を閉じ、ガスコンロに火を点けた。彼は、三十年以上繰り返してきた朝の作業に、胸を弾ませた。
　聖域は、神と人の家に分かれている。
　神の家は、一部屋だけの独立した建物で、東西南北に入口を持つ。四方には、玉砂利を敷き詰めた四角い庭が広がっている。
　人の家は、庭と竹林の間に設けられた。細く長い建物は、竹林の家の名で親しまれた。
　神詣では、日の出とともに始まる。日に一人が選ばれ、神殿で一昼夜を過ごす。
　食事は、朝、昼、夕の３回。竹林の家から膳が運ばれる。何もない空間に線香が灯され、芳しい香りで満たされる。人は神に祈り、神の食事を見守った。線香が消えると人が神に見守られ、神のお下がりをいただいた。
　日が沈み、神が去っても、神詣では終わらない。神殿の雨戸を締め切り、闇の中で一夜を過ごす。なぜ闇の中で眠るのか、誰も知らない。ただ習慣として続けられていた。
　最後のお籠りさんが去ったあと、時折、希望者が神殿に籠った。しかし、何もない部屋で過ごすことは、想像以上に辛く厳しい。みな去った。
　初めは、衣食住が保障された暮らしに、幸福な未来を夢見る。お籠りさんになりたいという。けれど、他人の支えなしに成り立たない無為の暮らしに耐えられず、作為を求める。太陽に背を向け、電灯を求める。
　多くは、昼の間に去っていく。夜の神殿に籠ったものも、闇の中で蠢く影に怯え、朝には去っていく。
　やがて誰も神殿を訪れなくなった。
　山根は、日が沈むと竹林の家に去る。神殿には籠らない。ただ一人、聖域に残り、神の世話を続けてきた。好きな竹細工を楽しむ穏やかな暮らしを愛した。けれど三年前の春、聖美が現れ、すべてが変わった。
　ある朝、山根が神殿の雨戸を開けると、聖美が眠っていた。声をかけても、身体を揺すっても起きなかった。
　山根は、聖美が眠るそばで、朝も、昼も、神のお下がりを食べた。夕方の膳を食べようとした時、やっと目を覚ました。
　聖美は、山根がすすめた膳を食べ、そのまま夜の神殿に籠ってしまった。
　翌朝も、そのまた翌朝も、なぜここにきたのか、何のためにここに居るのか、聖美の口から語られることはなかった。人びとは、聖美が神殿を去るまで待つことにした。けれど一週間経っても聖美は神殿に籠り続けた。
　見かねた山根は聖美を竹林の家に招いた。風呂を沸かし、お籠りさんが残した緋色の衣を渡した。聖美は黙って受け入れた。以来、人びとから聖美はお籠りさんと呼ばれるようになった。

夜明け

　白みはじめた東の空が、闇を薄めた。
　聖美は西の入口を開け放った。闇に慣れた目には、薄闇にとける庭の玉砂利も明るく見えた。聖美が庭に踏み出すと、黒い影が神殿を揺らした。
「おいで。夜が明ける」
　影は、闇を求めて東に逃げた。
　聖美は神殿に飛び込み、北の入口を開け放った。乱雑に散らばった夜具が輪郭を浮かび上がらせた。
　南東の角に逃れた影は、上昇と下降を繰り返し、小さく震えた。
「逃げても駄目よ」
　南の入口が開かれると床に敷かれた竹のむしろが見えた。
　追いつめられた影は、天井に逃れた。
　聖美は東に残った薄闇に立った。
「ずっと天井に張りつているつもり」
　影は、天井をぐるぐると回り始めた。
「遊んであげるから、降りてらっしゃい」
　聖美が手招きすると、影は天井から垂れさがり、聖美の体に巻きついた。
「日が暮れたらわたしのところへかえっていらっしゃい」
　白い手が黒い影をなでた。影がうねり、聖美の体を締め上げた。
　玉砂利が光を反射した。力を失った影は、聖美の体からずり落ちた。
「忘れないで」
　影は床に輪を描くと、輪郭を失い、光の中に消えた。

太陽が、弟神の訪れを告げる。
世界は色を取り戻し、動きだす。男が川沿いを走りだす。女が庭の花に水をまく。台所から湯気がのぼる。犬が飼い主を連れて走る。洗濯機は音をたてて回りだす。
弟神は、森羅万象を我が子として見守る。人びとの笑顔にうなずき、通り過ぎる。そして、愛しい妻が待つ神殿へ足を向ける。
キャンプ場では、子どもたちが楽しげに働いていた。
弟神は、ふいに左手を見た。すると少年が一人ぼっちで部屋に籠っていた。
少年は、ひどく眠そうだった。やせ細り、呼吸も弱々しかった。けれど、必死に参考書を読んでいた。
弟神は少年の肩に手をおいた。少年は気づかず、呪文のように英文を読み続けた。弟神は再び手をおいた。すると少年は背伸びをして、弟神の手を払い落とした。弟神の心は、痛みを感じた。少年をじっと見つめ、気づくのを待った。けれど少年は、目前に迫った試験以外、関心が湧かなかった。弟神は、それもよしとし、少年の指をそっとなでた。
竹林の家では、朝の膳の支度をおえた山根が、手を打ち祈っていた。弟神は山根に親しみを感じた。肩に手をおくと、山根は静かにほほ笑んだ。
膳は神殿に運ばれ、部屋の中央に据えられる。神への祈りは、線香が消えるまで続く。
聖美は膳の脇に座り、何もない空間を見続けた。山根は庭先に立ち、聖美を見守った。弟神は神殿を照らし、すべてを見守った。
世界は光にあふれ、輝きを増した。